

駅前の居酒屋を出た瞬間、暴力的なまでの雨粒が視界を白く染めた。折りたたみ傘なんて気休めにもならなくて、アスファルトを叩く激しい音が、フラれたばかりの俺の心臓に突き刺さるみたいで痛い。

「……最悪だ。女の子にフラれた日に、こんな土砂降りの雨なんて。ほんと、俺ってついてない……」
「今さらだろ」

隣を歩く隆直の声は、雨音に紛れてもなお、ゆったりと響く。

高校からの腐れ縁。同じ大学に進んでからも、俺たちは当たり前のように一緒にいた。無表情で何を考えているか分からない隆直だけど、不思議と一緒にいると落ち着く。

……いや、落ち着かせてもらっている、というのが正しいのかもしれない。

チラリと隆直を見る。濡れた前髪を無造作にかき上げた彼の横顔は、街灯の光を弾いて、彫刻のよう

に端正だった。女に困ったことなんて一度もないという男の余裕。俺みたいな男で女性器を持つカントボーイとは、住む世界が違う。

「……また、理由も言われずにフラれた。隆直みたいに普通に格好良ければ、あんな『ごめん、やっぱり無理』なんて言われずに済んだのかもだけどさ……」

酔ったせいで卑屈な本音が零れ落ちた。

俺の身体。服の下に隠された、男とも女ともつかない、この歪な造形。カントボーイ。その事実を知られるのが怖くて、女の子に対しても、いつもどこか中途半端だった。

「そんな女に捕まらなくてよかったな」

「そんな女って……。隆直はいーよな、何もしなくても女子が群がって」

「別に。そんなの好きなやつじゃなきゃ、意味がないだろ……」

「……そっか」

「ほら、こっちだ」

隆直の声は、激しい雨音の中でも驚くほど明瞭に俺の鼓膜に届いた。腕を掴む彼の指は、決して力任せではない。それなのに、向けられた意志に抗う術を俺は持っていなかった。

隆直に身を任せ、路地裏を進むと、数メートル先で急に景色が毒々しく塗り替えられた。

雨に滲んだピンク色のネオン。ラブホテルの入り口を照らすその光が、濡れたアスファルトの上でぬらぬらと波打っている。さすがに驚いて俺は足を止めた。

「ちょ、ちょっと、待って……！ 隆直、こっちはラブホ街じゃん！」

「立ち止まれば余計に濡れる。早く入れ」

「男同士で入るところじゃないじゃん！」

「雨宿りには最適だろ」

「いや、でも、ここは……っ！」

情けない声で抵抗してみるが、隆直は振り返りもしない。ただ俺の手首を掴んだまま、当然のような足取りで自動ドアを抜けていく。

ロビーの乾いた空気が、濡れそぼった肌を急激に冷やした。隆直は無表情のままパネルを操作し、流れるような動作でチェックインを済ませる。その間、俺は周囲の視線を気にして、縮こまることしかできなかった。

「……嫌なら、今すぐ帰ってもいいんだぞ」

エレベーターを待つ間、隆直がボソリと呟いた。

「え……」

「雨の中、また一人で泣きながら歩きたいなら、止めはしない。……だけど、しばらくはここにいる方がいいと思うぞ」

隆直はいつだってそうだ。俺に決定権を委ねるふりをして、実際には俺が隆直の手を離すこと、でき

ないことを知っている。

今日、女に振られたばかりで、独りになるのが死ぬほど怖い今の俺には。

結局、俺は何も言い返せず、彼の後ろをついてエレベーターに乗り込んだ。

部屋に入ると、遮断された雨音の代わりに、エアコンが稼働し始める低い音が響いた。

隆直は落ち着いた手つきで暖房の温度を上げ、備え付けのタオルを俺の頭に放り投げた。

「いつまでそこに立ってるんだ。早く着替えないと風邪を引くぞ」

「あ、うん……。隆直こそ、早く乾かしなよ」

「俺はいい。……それより、お前だ」

隆直が歩み寄ってくる。彼は俺の前に立つと、濡れたシャツ越しに俺の肩へ大きな手を置いた。低い体温が布地を透かして伝わり、それだけで心臓が跳ねる。

「じ、自分でできるから……」

「指が震えてる。……ボタン、外せないだろ」

指摘されて初めて、自分の手が小刻みに震えていることに気づいた。隆直の指先が、俺のシャツの第一ボタンに掛かる。

「い、いいって……っ。隆直……」

「ダメだ。昔から、お前は放っておくとすぐに体調を崩す」

彼は無表情のまま、淡々とボタンを外していく。一つ外れるたびに、濡れた布が肌から剥がれる冷たさと、隆直の視線に晒される熱さが交互にやってくる。

シャツがはだけ、俺の普通とは違う身体が露わになっていく。

俺は男だ。だけど、この胸には、女性のような膨らみがある。俺は全人口の約5～7%にあたる、カントボーイだ。男性性を持つが、男性器はなく、女

性器を持つ。

「……っ、……ん」

普段は必死に潰して隠しているけれど、水分を吸って重くなったインナーは、その事実を無慈悲に強調していた。隆直の長い指が、最後に残ったインナーの裾に指をかける。

「あっ、……だめ、それは……っ！」

「濡れたままにしたいのか？」

隆直の瞳が、至近距離で俺を射抜く。その瞳には、困惑も侮蔑もなく、ただ深い静止した熱だけが宿っていた。

俺が言葉に詰まっている間に、インナーは無造作に脱ぎ捨てられた。剥き出しになった俺の胸。男のそれよりもずっと白く、柔らかな肉。隆直はそれを、隠そうともせずじっと見つめてくる。

「……っ、な、なんだよ……！」

「いや、いつ見ても綺麗な身体だと思って」

「嘘つけ！ こんな身体……普通は、引くだろ」

「そんなことを思ってたら、俺はいまお前の胸を揉んでない」

隆直の大きな手のひらが、俺の膨らんだおっぱいを下から掬い上げるようにして包み込んだ。

「ひ……っ！ あ……っ」

隆直の指先が、柔らかな肉に深く沈み込む。

「……冷えてるな。……ほら、こうすれば温かくなるだろ」

ぐにゅっ♡ じわり♡ ぐちゅり♡

「あ、あ……っ♡ んんっ……たかな、お……っ♡」